

# 美術科(中学校)の 成果を上げるための二つの提言

Part 1 ; 『創造活動の喜びを味わう』 ことの意義を考える

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

未来をになう子どもたちへ  
日本文教出版

「まなびと+vol.5」は内容が多いため2分冊にします。「まなびと+」のvol.1, vol.3, 及びvol.5のPart2と併せてお読みください。

## 1. 創造の喜びを味わい、美術を好きになることは生涯学習の出発点です(松井一雄)

私は学校を訪問して、校長先生を初め、様々な先生方とお話する機会があります。そこでよく「私は絵を描くのがダメですね」とか「美術はよくわからないので…」などと言われることがあります。

謙遜の意味の時もありますが、美術に苦手意識もっている方々も少なくないようです。本来、美術は楽しいはずなのに、それを敬遠していることを残念に思うとともに、中学校美術科に関わる一人として、これまで何を指導してきたのかと責任を痛感しています。

実際、いろいろな学校の授業研究に参加しても、用具の使い方など技法や知識を重視して、発想や構想を引き出す面が弱いのではないかと思えることがよくあります。

学習指導要領の教科の目標で特筆すべきは『創造活動の喜び』や『美術科を愛好する心情』から『豊かな情操を養う』ことが求められていることです。小学校図画工作科でも同様に、『つくりだす喜びを味わう〜』と示されています。このような教科は、他のどの校種、どの教科を見てもありません。中学校美術科及び小学校図画工作科の教科として特色や独自性であると考えます。

また、中学校美術科には、発想や構想したことを表現するための技能について示したA表現(3)があります。『創造活動の喜び』は、生徒自らが発想・構想したことを具現化できたことにより、味わうこ

とができると考えます。せっかく良い発想や構想をしても思うように表現する技能がなければ、失望となって創造の喜びを味わうことはできません。作品をつくりあげ、鑑賞によって美しさを感じ取った達成感、充実感は自信や喜びにつながります。情操とは、こうした心の活動を通して豊かになっていくと考えています。

そのためには、創意工夫して表現するために必要な材料・用具などの特色を学ぶとともに、計画性や見通しをもって表現するための知識・技能の習得が大きな意味をもってきます。

現代、美術の分野は多種・多様であり、限られた授業時数でとても多くの分野を指導することは不可能です。それでも、教科の目標は題材を教えることでなく、生徒の情操を養うことを目指しています。

授業者には、日々の教育活動や研究を通して自身の美術観やセンスを磨き、独創的で興味深い題材を開発し、生徒の興味・関心・意欲を高めながら美術の基礎を習得させていって欲しいと期待します。

こうした活動の積み重ねにより、美術を愛好する心情が育ち、生涯学習の基礎づくりを目指すことができます。ここに、中学校美術科の教科としての存在意義があると考えます。



## 2. 「様式」の不在, そして「造形遊び」から考える中学生の『美術を愛する心情』(大泉義一)

小学校図画工作科, 中学校美術科では, それぞれ, 教科目標に『つくりだす喜び』, 『美術を愛好する心情』を掲げ, 創造活動の喜びを味わうことが目指されています。そしてこのことの実現により, 生涯にわたって美的な価値を大切に作る情操を養うことができます。

ここでは, そのために, 中学校美術科の学習指導において何ができるのか, 以下, 2つの視点から考えていきたいと思えます。

まず1つ目の視点は, 中学生という成長・発達の段階が, V. ローウェンフェルドのいうところの「描画の危機」真っ只中にあるということを鑑みることです<sup>1</sup>。つまり思春期にある中学生にとっては, 描画において「どのように描けばよいかわからない」というように, 自身の表現活動を描画技能と照らし合わせて自己評価しており, 自己達成が見込めない場合は「私には才能がないのだ」と判断し, 極端な場合, 表現することを“やめてしまう”のです。この「危機」については, 中学校美術科の学習指導にとって永年にわたり懸案とされてきた命題でもあります。

新井哲夫は, その「危機」の要因を次のように解釈しています。思春期にさしかかる子どもは, 表したい主題を表現するための方法としてこれまで納得していた, いわゆる“子どもらしい表現(例えば児童画)”を放棄するようになります。そして, 社会や美術文化との関係の中でそれが獲得し直されるに至りながらも, 未だそれが獲得し得ていない状態にあるとしているのです。さらに新井は, そうした状態を「様式の不在」と定義しています<sup>2</sup>。

それでは, その「様式の不在」を克服するための方策は, どのように考えることができるのでしょうか。「様式の不在」の要因が, 子どもの成長・発達にあるのなら, 小学校における指導からヒントを得ることが必要なのではないのでしょうか。

例えば「造形遊び」です。小学校学習指導要領解説には, 「造形遊び」は次のように規定されています。

「材料やその形や色などに働きかけることから始まる」

「身近にある自然物や人工の材料, その形や色の特徴などから思い付いた造形活動」

「材料に働きかけ, 自分の感覚や行為などを通して形や色をとらえ, そこから生まれる自分なりのイメージを基に」

以上の規定を見ていただくと, 「造形遊び」が誤解されがちな“ダイナミックな活動(でなければならぬ)”というイメージとはまた違ったとらえ方が見えてきます。すなわち, あらかじめ「主題」を「発想」し, それを実現するために「構想」という段階的な表現プロセスではなく, まずは「材料」を「操作」という「行為」を行いながら, 試行錯誤的に「主題」の「発想」と「構想」を行っていく表現プロセスであるというとらえ方です。

ところで, 先ほど紹介した「様式の不在」における「様式」とは, 「知識・技能」であると考えられます。表現においては, その「知識・技能」が自分が「表したいこと」, つまり「主題」と結び付いていることが必要です。ここにおいて先述した「危機」とは, 子どもが「表したい主題」と「表すための知識・技能」との間に“ギャップ”がある場合に生じることがわかります。したがって, 「主題」の「発想」とその実現の道筋の「構想」, そして実現のために必要となる「知識・技能」とをできるだけ〈一体的・往還的〉に扱った指導が望ましいことが見えてきます。

こうした指導の考え方は, 中学校学習指導要領解説(美術編)にも, 「主題の発想」と「構想」の間に「材料」や「行為」が位置付くこと, つまり, 主題が曖昧なままでも材料に触れ行為することから主題の発想と構想を同時的・往還的に行うことへの配慮が示されています。そしてそこでの“試行錯誤”の機会が, 「主題の発想」「構想」を深めると考えられているのです。

ここで先ほど提示した「造形遊び」のとらえ方を



▲図1『絵の具の中の自分』

思い出してみてください。頭の中で考える前に材料に触れ、それをいろいろと操作し行為する中で思い付くことから主題を発想し、同時に表し方も材料操作の試行錯誤の行為から構想していくような表現プロセスです。こうした「造形遊び」的な表現プロセスの確保、そしてそのための学習指導が、中学生の「様式の不在」を克服し、ひいては『美術を愛好する心情』を育てるために必要なのではないのでしょうか。

以下にその事例を紹介します。

#### ①『絵の具の中の自分』（中学校第1学年）

この題材では、はじめに八つ切りの画用紙に絵の具による様々なドローイングを試みます。そして何枚も試みられた絵の具表現の画用紙の中から、自分の思いに沿ったものを何枚か選びます。さらに、1枚の画用紙の表現の中から、よいと思う部分をトリミングして切り抜きます。そして、それら表現の断片と自分の写真を台紙に組み合わせてコラージュすることで自分らしさを表現します。(図1)



▲図2『〇〇くん／〇〇さんの日常』

#### ②『〇〇くん／〇〇さんの日常』（中学校第2学年）

生徒たちは、自身の1週間の生活の中で身近材（気になるモノ、生活ごみなど）を集めます。次に、画用紙にいろいろな感情をドローイングで表現します。さらに木材を組み合わせて自分のお気に入りの形のフレームをつくります。そして集めた身近材とドローイング、フレームを、ペアを組んだ友人と交換します。友人の集めた身近材、ドローイングを、友人のつくったフレームに貼り付けていくアセンブラージュにより、友人の日常を表現します。(図2)

以上の題材では、「材料（の魅力）」と「（そこから生じる）行為」が、主題の発想、その実現のための構想や技能を生み出す契機として位置付けています。これは自己の表現を、材料との関わりから成立させているのだといえ、このような「造形遊び」的な表現プロセスが、中学生の主体的表現を引き出すための学習指導足り得るのではないかと考えられます。

### 3. 中学生の認知発達段階から考える『美術を愛する心情』（大泉義一）

2つ目の視点は、中学生という発達の特徴を鑑みることです。もちろん中学生といえども、学年、さらには生徒一人ひとりの持ち味によって、その発達には大きな違いがあります。それでもなお全体的な発達の特徴として、物事をより広い視野、高次な見方でとらえようとする傾向が認められることも確かであり、それはJ.ピアジェのいう形式的操作が可

能になるということでもあります。そしてそうした傾向は、「美術」に対する考え方にも反映されるようになります。ゆえに、中学校の、とりわけ最終段階においては、こうした「美術」に対する高次な思考を発揮させるような指導が「美術を愛好する心情」を育くむことにつながるのではないのでしょうか。

例えば、彼／彼女らは、「美術とは？」「美とは？」



という問いに対しても、哲学的、形而上学的な思考を行うことができるようになります。以下は、中学校第3学年の生徒たちの「美術とは?」「美とは?」という問いに対する考えです。

- …ぼくの考える「美」とは、人が見て初めて生まれるものではないかと思う。見る人が、この人はどんなことを作品によって語りかけようとしているのかが理解でき、作者との「心」での関わりができてこそ、存在するものだと思う。(男子)
- …他人にバカにされようと、自分では「こうするのが一番気持ちいい。これがいいのだ!」と思っていれば、別にどーってことはない。美はいーねー。ストレス解消だよ。(女子)
- …日常生活を、より有意義で快適なものとする上では、大変大きな役割を果たしているといえる。ちょっと部屋の配色を変えたり、「でっぱり」を

変えるだけで、その部屋から受ける印象や用途が全然異なってくる。これから、美の役割が、どんどん大きくなるのではないかと、思う。(女子)

このように、中学生の考え方には、生涯にわたって『美術を愛好する心情』につながる見方や考え方が構築されつつあるのです。表現や鑑賞の活動を通して、こうした彼/彼女らの思考を大切に育てていくことが、中学校の教師に何よりも求められているのではないのでしょうか。

Part 2では、横浜市における「カリキュラムによる一貫教育」の実践例を紹介いたします。

註

- 1 ヴィクター・ローウェンフェルド『美術による人間形成—創造的発達と精神的成長—』黎明書房、1995年
- 2 新井哲夫『中学校美術授業づくりの基礎基本』日本文教出版、1996年



## 松井一雄



[前東京都教職員研修センター 東京教師道場 芸術(図画工作・美術)組教授 matuithi@west.cts.ne.jp]

1946年生まれ。品川区立中学校で荏原第二中学校長在任中、校区の小学校図画工作科と美術科の一貫教育に3年間取り組んだ。2006年から東京都教職員研修センターが推進する東京教師道場芸術(図画工作・美術)組に教授として参加し、2013年3月に退職する。

## 大泉義一



[横浜国立大学教育人間科学部准教授 研究室 HP: <http://www.7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/>]

1968年生まれ。博士(教育学)。東京都公立中学校、東京学芸大学附属竹早小学校、北海道教育大学旭川校准教授を経て現職。教科教育学、授業研究、デザイン教育研究が専門。学校内外を越境する造形ワークショップ実践『アートツール・キャラバン』を展開している。

※この資料は、教科ご担当の先生のみならず、教科の枠を超えた数多くの先生方にお読みいただければ幸いです。

## まなびと+plus vol.5 (Part1)

日文教育資料 [図画工作・美術]

平成26年(2014年)10月15日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社  
〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33252

## 日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16  
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14  
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市中区葵1-13-18-7F-B  
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1  
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690